

# 「地域問題」としての獣害

## —創造的な解決にむけて—

兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 講師 鈴木克哉

### 1 深刻化する獣害問題

現在、多くの農山村は「獣害」という深刻な課題を抱えている。シカ、イノシシ、サルなど中・大型哺乳類が地域の農林業に与える経済的な影響はもとより、集落内に野生動物が出没することで受ける日常生活への影響や、日々丹精込めて栽培している自家用菜園に対する食害など、簡単に金額で表すことのできない切実な「被害」もある。現場では「こんなところに住みたくない」という悲しい言葉を耳にすることもあるなど、獣害は営農意欲の低下はおろか、農村の生活基盤そのものを脅かす問題といっても過言ではない。

こうした問題への対処として、もっとも多い地域の意見は「数を減らすこと」と「山を豊かにすること」だ。いずれも、行政に対して求める施策といえる。確かに、個体数管理や生息地管理は必要であり、広域的・中長期的な視野で、科学的・計画的な野生動物管理を行っていくことが不可欠だ。昨年、従来の「保護」を中心とした対策から、積極的な捕獲も含めた「管理」への転換を図るための法改正が成立するなど、国全体としても本腰を入れて取り組むべき課題となりつつある。

### 2 「地域問題」としての獣害

しかし、ここで声を大きくして言いたいことは、あなたの(あるいはあなたが関わる)地域の獣害問題を解決するためには、獣害を「地域問題」として捉える視点が重要であり、あなたをはじめとする地域の力が不可欠だということだ。個体数管理や生息地管理だけに期

待してはいけない。そもそもこれらの対策は被害に対して直接的な効果をもたらすものではなく、中長期的に野生動物の数や生息地との関係のバランスを調整する目的で実施されるものである。間接的な効果が表れたとしても数年、いや数十年先かもしれないし、そのときでも、あなたの農地付近に1頭でも野生動物が生息していれば、一晩のうちに多大な被害を受けてしまうこともあるだろう。

自分の農地・集落そして地域を守るために何ができるかを考えることがまず重要である。幸い今では、個人の農地や集落で発生する被害を軽減するための方法論はずいぶん整理されている。対策を行政まかせにするのではなく、住民自らが被害発生要因や被害対策のための知識を学習したうえで、「集落ぐるみ」で被害軽減を図る事例も増えており、実践的な研究によってその有効性が示されている。野生動物の行動特性を踏まえた有効な防護柵の開発や野生動物を引き寄せない営農管理など、地域が実施可能な具体的な技術開発と普及活動も進んでいる。今、こうした情報は入手しようと思えば手の届くところにある。まだまだ体制や人材に不足の面があることは否めないが、ぜひ積極的に情報を収集し、必要であれば専門家を頼って欲しい。

### 3 獣害対策の担い手の問題

一方、すでに地域が主体となった獣害対策に取り組んでいる方は、そう単純に事は進まない大きな課題が現場にあることを痛感していることだろう。地域社会における獣害対策

の担い手の問題である。多くの農山村では人口減少や高齢化が進行していて、必要な対策を十分に実施できない、今は実施できていても今後継続が難しい状況にある、という地域が少なくないということだ。だからといって、対策をしなければさらに獣害は激化し、その結果として耕作放棄地は増え、野生動物の分布がさらに拡大していくことが予想される。獣害対策の担い手の問題は、ひいては農山村の持続可能性の問題であり、多くの地域にとって、獣害対策は住民の負担感が強いというえに、解決にむけた展望を見出しにくい状況があることは確かだ。

#### 4 発想を変えることが必要

獣害の深刻化は農山村の衰退の要因でもあり、結果ともなっている。こうした負の循環を断ち切るためには、発想を転換する試みが必要だ。つまり、獣害対策に取り組むことが正の循環を生むしくみづくりが、今、求められている。

こうした試みが、たとえば私が関わる地域でも、起ころうとしている。兵庫県篠山市の東木之部という集落では、裏山に防護柵が設置されている。効果を維持するためには定期的に点検作業を行う必要があるが、高齢化した集落にとって急峻な山道を歩くことは「つらく」「しんどい」作業である。しかし、どうせ実施しなければならぬ作業ならば、「楽しみ」を伴う作業に転換しようと、柵の終点からさらに離れた頂上を刈り拓いて展望台をつくり、そこで休憩をして集落に戻る散策道を整備した。この頂上はかつて狼煙台があったと伝え聞く場所で、日の出や雲海までも望める絶景は、今では「集落の自慢」となり、防護柵点検は「健康のためにも良い運動になる」

と認識されるようになった。また、春には尾根沿いに群生するミツバツツジが開花するため、集落外の人が山歩きにも訪れるスポットにも変化した。同じく篠山市の今谷集落では、人手不足を補うために都市部から人を呼び、獣害を含めた農村の課題について知ってもらうためのイベントを実施している。ここでも獣害対策はきっかけに過ぎず、その過程で地域に潜在する豊かな資源を再発掘し、参加者とわかちあう交流事業として新たな展開を思案中だ。

#### 5 創造的な解決にむけて

これから求められることは、獣害という負の課題解消だけを目的とするのではなく、持続可能な地域づくり(地域再生)への道筋をデザインしながら、その一途として獣害対策を位置づけるという視点ではないだろうか。そのための支援を誰がどのように担うかについては、多様な形態がありそうだ。獣害対策の基礎的な知識だけでなく、地域づくりに結びつける視座を持つことはもちろん、地域の想いに寄り添える身近な立場が重要となりそうである。さまざまな関係者が立場や能力を活かして協力的に支え合うしくみやネットワークも必要だろう。このような提案は文字にすることは簡単だが、何より重要で難しいことはどう実践するかである。だから私も始めることにする。

獣害は創造的に解決する／しなければならぬ時代にある。あなたの地域の獣害はどのように解決できるだろうか。そのために、あなたは何ができるだろうか。各地でさまざまな挑戦が始まることを期待している。

(すずき かつや)